

長崎における南蛮時代のポルトガル跡をとどめる文化遺産

著者

Inês Carvalho Matos (イネシュ・カレヴァリョ・マットシュ)

略歴

コインブラ大学社会学センター及び学際研究所における博士課程プログラム「大航海時代のポルトガルの痕跡をとどめる歴史的文化遺産」在籍

新リスボン大学人間社会学部・大航海時代外地歴史センターリサーチャー

芸術文化遺産上級専門家

美術史家

美術史教師

書記法及び翻訳に関して

この記事の主要読者（大学院生や研究者等）に認識されているような市・県・人の名は日本語アルファベット表記に相当するものを使用している。例えば Nagasaki (Nagasaki)、Tokyo (Tóquio) など。

ポルトガル語版はオリジナル表記が必要不可欠だと考慮される日本の言葉・概念を丸括弧中にローマ字で表している。

日本語版では“arte nanban”「南蛮美術」のようにポルトガル語で書かれるべき言葉はダブルクォート内に、日本語における表現または語彙を鉤かっこ内に添えて表記してある。ダブルクォート内の言葉または文章が本や記事からの引用である場合、事前に述べた上で日本語表記においての約束事に従って和訳を鉤かっこ内におくこととする。

図(写真・版画等)に関して

ここに使用し、読者が正確に理解しようとするには小さすぎる図については説明文と同じ番号の別添え図をご覧いただけるようお願いする。複製された版画はその古さ故にパブリックドメインであり、写真については寛大にも銅座町から譲られた図 6 以外は著者によるものである。したがって、著作権に反するものは無い。

出版に関して

この記事は現在の長崎市の衛星写真上に 1600 年代の長崎の境界が定められた Google Earth ファイルを別添えとし、歴史的意義並びに遺産価値のある場所には印をつけてある。ファイルはひたすらこの研究範囲におけるものとして作り、執筆者から権利が移ることはあり得ない。読者が内容にアクセスするためのインターフェースの開設は発行者の責任下にある。

記事のテーマ

この記事は日本におけるポルトガルに焦点を絞った南蛮時代の有形、無形遺産の理解のために重要な都市である長崎について同テーマで極最近出された記事である Sofia Diniz（ソフィア・デニシュ）著、カルースト・グルベンキアン財団「Patrimónios de Origem Portuguesa（ポルトガル由来の遺跡）」を土台とし、その情報を改新及び補完していく。実際にパリンプセストのように長崎を考察する時、ポルトガルの存在を示す有形跡として見付け得るものは非常に限られている。自然災害や争いによる形態上の変化以外にも、沿岸線の変化及び埋め立てが昔のポルトガル施設の跡を探す上でとりわけ障害となっている。しかしながら、この記事にて長崎の創立及び創立初期に関しての誤りの克服・原典及び領地の研究における注意・考古学遺跡及び史跡以外の調査・無形文化遺産の価値として明らかになった意味内容について長崎の研究手法並びにポルトガル・日本の関係における現在の役割をどのように再確立し得るかを論証したい。執筆者はこの記事を以って客観的な叙述抜き推論を土台とする着想の批評同様、現地調査（検分）の工程での仮説の実証のように人間社会科学分野にてどう科学的な調査の基本を適用できるか証明する一つの調査例を示すつもりである。批評的な意味が無く、また日本人研究者による調査を考慮していないポルトガルの歴史的な原典（史料）の自由な若しくは文字通りの解釈傾向に逆らってみようと思う。ポルトガル修史で長崎の問題を論じている様に、歴史そしてとりわけポルトガルの歴史解釈の方法としての修史が彼の地でのポルトガルの痕跡を示す唯一のかたちである筈はないと執筆者は考えている。

序論

主にポルトガル人読者にとって長崎は広くは知られていない土地であり、極東においてポルトガルの痕跡をとどめる地についての歴史論議の中で述べられたりすることはあっても、実際には感覚的記憶または空間的感覚を欠いている。したがって、ポルトガル人たちの修史が永続している間違いを繰り返さないため、長崎は一県の名であり、その県庁所在地である都市名でもあることを明らかにしておくべきであろう。長崎県は日本の南、九州の西に位置し、県境を佐賀県（北東）及び熊本県（東）となし、北西は平戸、南西は五島列島、そして南東は南島原まで広がっている。長崎は現在 16 世紀の終わりに茂木や浦上等自治村と考えられていた地域を含んでいる。その地形は 18 世紀に始まり 20 世紀に特に集中的に行われた埋め立てと原爆等の自己侵食的流れにより非常に変化した。市を構成する小区画としての町編制・道・運河・橋の配置・高地と谷を示すはつきりとした特徴は保たれている。一般に市の中心部は認識し易く、17 世紀の長崎の都市計画を知っている者であれば間違いなく土地勘がはたらく筈である。このようにこの記事は長崎市に関するものであり、長崎県内の様々な市町村に関する事柄全てについてではない。

長崎市と長崎県の混同は日本人以外（特にポルトガル人）の研究者にあるデータを推論させ、根拠のない因果関係を確立させている。最も再発している間違いは、日本の教会のため人的資源の育成に専心する場所であり、また天正使節としてヨーロッパに派遣された4人の少年が旅立った場所「長崎のセミナリヨ」が長崎の町にあったと受け止めることである。この記事執筆の際に調べた全ての原典（ポルトガル人が書いた若しくはポルトガル語で綴られたものに限る）は「長崎のセミナリヨ」の場所を長崎の町の外、北有馬にあったことを明らかにせず、曖昧に述べている。このことは北有馬が別の大名の領地であった事実同様、特に際立っている。長崎の土地は大名・大村純忠の領地の一部であり、純忠は城下にセミナリヨ創設を支援した大名・有馬晴信（日野江城城主）と姻戚関係にあった。しかし、この二つの場所または背景は断じて混同されるべきではない。セミナリヨは長崎県の南東の端、より正確に言えば南島原にあった。長崎と有馬のセミナリヨの道程は17世紀の道筋で最短でも2日を要した筈だ。人間共同体、職業、社会的階層そして特に文化的生活においてこの二つの位置は根本的に違っていた。

したがって、この記事のテーマである長崎市以外に長崎県内で見られる日本国内でポルトガルの存在を示す跡という研究において別の興味深い点である。痕跡は考古学（稀）、都市計画（ほとんど存在しない）、有形文化と物品（宗教に関するものは多量にある）、文書（稀）、または語彙、語り伝え、祭り等の文化的習わし（多量）と様々な形で存在する。

参考資料及び現地調査による領地の解釈



図1

長崎の地図。内町を白、外町を赤に色分けしてある。内町は長崎市創設時、長崎港開港時の六町に当たる。

この図の模本の一冊が長崎歴史文化博物館常設展示室で公開されている。原図は 1634 年から 1642 年の間に創作されたと推測される。図 1 では都市図を見ることが可能だ。この資料は長崎の初期に関する文献目録に特に使われており、1580 年から 1587 年のイエズス会支配を証明するのに大変有効である。それ以外にもこの図にまるで道路と区画の事前規定モデルがポルトガル占領時代（そのような形になったことは一度もないが）に計画されたかのような 16 世紀のポルトガル人によって創られた都市区画整理との類似点を見た者もいる。これは、現地に関するデータよりイデオロギーを優先する著者がどの程度科学的調査を問題視できるかを示すものである。この図の解釈の様々な意図がグラフィック内容または説明文を解析させなかった事実以外にも、資料そのもの、それ自体が表すもの、またどのように創り出されたかを考察してこなかった。日本ではこのような都市図はヨーロッパの都市図基準で創られなかったもので、比較することは直に重要ではない。その一方で頻繁に図解法による比較が行われており、単に土地を訪れることのみで反論可能である地形学上の空間または土地利用については考慮に入れられていない。

図 1 の解釈を目的にこれより布袋厚の著書『復元！江戸時代の長崎』を見ていく。表題によると著者の意図は過去に失ったデータを提示することにある。使用した本は 2010 年発行の第 3 版である。第 1 版は 2009 年 8 月 30 日、第 2 版はその直後 2009 年 9 月 30 日であり、この事実はこの本が一般市民にも研究者たちにも非常に受け入れられてきたということであるから考慮されるべきであろう。25 ページの布袋の言葉によれば、図 1 は地元の保管資料として、また国レベルのものとしても長崎市の図についての最古の文献である。

この地図には出島が描かれている。この扇形の赤く記されている人口島は「1634 年から造成」された土地に当たる。また、布袋はこの地図に遊女の町、太夫町が載っていることも指摘している。「町」は地理的な場所だけではなく空間上でのある特定地で、場所が変わることもあるのを理解する必要がある。太夫町はその例で、「1642（寛永 19）年に遊女屋がうつってきて形成され」、後に丸山町及び寄合町に町名変更、この場所での太夫町という名は短期間であった。出島及び太夫町の時期を考慮し、この地図は 1634 年から 1642 年にかけての長崎市の移り変わりを描いたものであると知る。文書としての素性について一重要データは高島家所有のもの（少なくともこの著者が執筆のために行った調査の際にはそうで、本文中の表現は「高島家の珍蔵品」）より制作された模本という事実の存することである。したがって、17 世紀後半に徳川幕府によって直に長崎奉行下に置かれた後も、最初の市行政に関わった者の子孫達の間で継承されてきた長崎市の地図として取り上げている。布袋は図の年代に関して「『寛永長崎港図』には、長崎奉行屋敷が本博多町にえがかれていて、もとの地図が 1633 年以前につくられたことをしめしている」と更に確定的な解釈をしている。その論拠は長崎奉行所が 1633 年の終わりに消失し、幕府と直に繋がることになる新たな奉行所を設けたことを手がかりとするものである。

ポルトガル人（及び一般に西洋人）著者達のこの図に関する多様で誤った解釈は資料としての図の触れられ方、若しくは模本を調べるという事実で恐らく説明がつけられるだろう。日本の都市及び港の地図はデータ内容を必然的に変更または現代化することなく、原図を大量生産するという当然のなりゆきの中で頻繁に複製された。だが、この現実には「原図」についての西洋的概念自体と合わない。このように寛延時代（1748～1751）には幕府がデータの本質的な現状化をすることなく正に古地図が制作された通りの模本を複数依頼した。その時、『寛永長崎港図』と表題がつけられ、その名前を未だ保っている。この時期に複製された参照の模本は布袋が調べたものと一致するに違いない。何故なら長崎歴史文化博物館の常設展示室にある模本についても言及しているからで

ある。その模本の余白部分には「明治 31（1898）年、長崎県知事の命により（中略）模写した」とある。博物館には 1884（明治 17）年につくられた模本も所蔵されている。この明治時代の模本とその原史料である 18 世紀の寛延年間のものとの違いは説明文が入れなおしてあるところだ。博物館で公開されている模本で確認できるその違いは現在の研究者たちが図をより理解し易くなるようにした。古い日本語草書体は既に一般的ではなくなかなか解釈し難く、現代式の説明文は視覚情報を補う。他の地図『享和 2 年肥州長崎図』の復刻版では判読し易いよう文字が入れなおされ発行されている。

説明文に関しては文字の入れなおしが行なわれているものの、この図中の地区または町（市の区画）の図は保たれ、17 世紀から 18 世紀にかけて行われた地区変更以前に市がどう整理されていたかを映し出している。その過程にて幾つかの町（区画）の名が他と合併されるのに従って変わり、長崎の初期数十年間、地名において最も一般的であった出身地、身分階層、職業的な名称を失っていった。例えば、毛皮屋町は新橋町に合併された際に名称が変わった。

白の地域、内町はより古い集落であるということだけでなく、初めにイエズス会自治、後に長崎奉行の責任下と行政そのものによって他の市の地域と区別されていた。布袋が市の歴史（P88）¹を再構成するために参照した日本の文献によると、大村純忠はポルトガル人達を港に迎え、彼らの領地訪問に対する許可に関して彼らと合意に達した後、「長崎は大村純忠の命によって造成され」、その土地が「大村町、嶋原町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、文知町」の六町となった。大村、嶋原、平戸、そして横瀬浦はポルトガル人達が既に訪れていた土地で、そこではキリシタンになった者も出ていた。「1580 年（天正 8 年）浦上、茂木とともにイエズス会に寄進され」、市のこの地域はイエズス会支配下におかれた。

このイエズス会への寄進は長崎を真のキリシタン都市にさせた。「しかし、1587（天正 15）年、伴天連（ばてれん）追放令を出した豊臣秀吉に没収され」、町は中央（この時期は秀吉、後に徳川）によって直接支配されることになった。「このとき、町の数は一町ほどにふえていた。」内町の主な特徴はイエズス会の管理下におかれ、それ故に茂木と浦上も加えられることになった以外に、免税という点もある。地税の免除により内町は急速に発展し、創設当時の六町の他にも新しい町が増えた。1587 年以降も内町は免税という特権を持つ地区であり続けたが、「1592（文禄元）年、新たにおかれた長崎奉行により支配されることになった」。そうして、長崎の様々な地域における全ての行政は長崎奉行下におかれた。「1597（慶長 2）年になると、内町に編入されず、大村領に属する町ができはじめた」ということは、つまりこの時代的手段で埋め立て地を拡大することが出来ず内町が飽和状態となったということで、「このような町は、土地税の免除はなく（免除の外）、外町とよばれた」。市は更に拡大を続け、「1600（慶長 5）年ごろには内町が二十四町となり」、時が経つにつれて大名である大村の権力より重視されていった中央権力支配においてもこの発展を見守っていった。例として、「1605（慶長 10）年、長崎代官・村上等安の申し立てにより、幕府は天領だった浦上村の南半分および大村領だった長崎村を長崎代官の管轄地とした」。

したがって、1570 年から 1600 年代初頭の長崎創設は単に外国人が一つの港に到着し、そこに町を計画したというより更に複雑なものである。支援的であったり、敵対するものであったりと様々な勢力の存在があり、町にその痕跡を残した。六町の内部は平戸や横瀬浦などキリシタンの港

¹ この本については日本語以外、他言語版は見つからず、アヴェイロ大学講師・野口礼子の協力の下に日本語原典から解釈した。

町に関する名称を以って、大村純忠のやがてイエズス会に寄進することを目的とした日本のキリシタン町設立計画がどのようなものであったかを証明している。一方でこの中核の六町に岬の高台を囲む日本式の堀が築かれたことから、陸および海からの攻撃に対するキリシタン要塞都市とも解釈されている。この(イエズス会の?)堀は日本の文献にも描かれているが、その意義は大溝と堀という別の軍事的機能をもつ構造を考慮する時、更に明白である。

「一ノ堀」は1592年又は1593年に、深堀氏と西郷氏の敵対が因となり、(『寛永長崎港図』を参考にした)本の言葉をかりると「奉行役所の南北に」築かれた。これは水路や導水官の建設(行われてもいた)と取り違えるべきではない。問題の堀はこの二氏の土地の間にあり、その位置が原因で領土争いという枠を超え、更に宗教的対立に発展した可能性がある。『寛永長崎港図』に綴られている情報及び『復元!江戸時代の長崎』にてこの図に関する本文によると「1596(慶長元)年に「二ノ堀」、1601(慶長6)年に「三ノ堀」」が全て内町の中に築かれた。それらの堀が空堀なのかどうか、また人工の垣根と同様に土居や土塁が取り囲んでいたのかは明らかではない。それらの一つは長崎ミゼリコルディアがあった高台の正しく下に位置していた。

布袋は地図上で長崎創設の解釈についての提案もしている。著者は青で示された今日の長崎市の上に様々なレベルで色により過去の情報を再現した。この方法で様々な段階での都市の移り変わりが重ねられた。北西から南東にかけての二つの水路の間は16世紀のミゼリコルディアが存在したであろう所だが、現在は道路に変わっている。



図2

建物は堀に囲まれ、東・南・北を見下ろす地に石垣で支えられていた。この石垣が未だ存在すること、またこの場所の様々な用途を考慮し、著者はこの地点もその復元図に含んでいる。碑の文字は縦に「ミゼリコルディア」と読み、ポルトガル語で "Misericórdia" のことである。

追加情報として、町歩き観光コースの一部をなす説明版に英語と日本語で簡単な文章が書かれている。それには、「日本人キリシタンのジュスティーノが建てた。ここにはキリスト教ヒューマニズムによる病院と孤児・老人施設があった。慶長19年(1614)のキリシタン弾圧後もこの施設だけは残されていたが、元和6年(1620)、ついに姿を消した。後世まで「慈悲屋」と呼ばれ、住民に語り伝えられた。今日の社会福祉施設の先駆けである。」



図 3

ミゼリコルディア本部の正門に出る石段は東から西へ上っていく。

この堀の向こう側には別の傾斜は無く、南北に道が通り、建物が林立するかなり広大な高台となっている。道は市の文化財管理及び観光事業により「フロイス通り (Rua Luís Fróis)」と特徴的に命名されており、キリシタン達、主にイエズス会士達がこの他よりも高い空間を歩き回った。弁解するに、高地を支える石垣は 16 世紀に初めて築かれて以来、何世紀にも亘って、補強し維持されてきた。しかしながら、その痕跡が認められる深さに至るまでの発掘調査をしていない。

ミゼリコルディアへの石段下の家並みは、今なお今下町の名で知られている。この名称については、港町が下町であるというポルトガル人創設都市に類似した港と混同すべきでない。何故なら長崎では港は町の反対側にあり、南西に数百メートル離れているからである。しかしながら、この名は上におかれた空間に関しての町(地区)の定義であり、住宅街の一つとしてミゼリコルディア複合施設(及び石段)跡地の使用を想起させる。後述の説明ように、この「下町」は青果、そして特に魚市場としての商業的機能を本質的に持ち、現在の築町まで拡大していた。今下町は今日の区画としての町制度と合わないが、広く普及した呼称である。当該の地域は(大政奉還後、明治維新に)明治天皇の下、領土管理を秩序立てよう市制及び町村制が施行された 1889 年からこの名で記録された。市は 1904 年のゼロから始められた埋め立てによる新長崎港完成などを例に 1900 年以降かなり変化した。町の名前と境界は、市が軍事基地領域となり上空からの地図がない 1935 年までに変更、合併または廃止された。原爆による破壊ために不可欠であった再建の後、町は再び変更されることになった。1962 年は今下町の名が出ている最後の年である。1963 年には廃止され、二つの町²に分割された。インタビューでは年配の地元住民、或いは研究者たちだけが旧名について言及した。この細長く伸びた町では同じ道で商店街としての使用が続いていることに気づく。この町の輪郭は一本の細い道とその両側の家並みと店からなっている。現在これに当たる道は出島に近くにつれ右にカーブし、北東から南西に走っている。道の両側には 3、4 階建て建物の 1 階に製品及びサービス業の小さな店が並んでおり、出島方面に抜ける人は二つのビルに挟まれ、その裏を通り過ぎる右側の上り坂の狭い石段に行く。

築かれた町という字義をもつ築町は前述の今下町に隣接し、東にそして南に広がり、部分的に導水官上にある。この地域は、明治初期の前に都市化されていなかった。埋立地の建設及び土地

² 長崎市中心部の町の変遷図 http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:Towns_of_central_nagasaki.gif

強化は「再び新しく築かれた町」という築町の真の意味を考えさせる。埋め立て前は現築町の極僅かな部分だけで、（今下町を通り）北東から南西に流れる水路と前述のキリシタン要塞があった高台の間にあった。したがって、現築町交差点は海岸線にあった。築町の店主達とその店に通う人々は大昔からこの場所に店が並んでいたと断言し、それはポルトガルにおける長崎創設神話に要約されている。この事実を確認できる記録はないが、築町町内会は信念を保ち、一致して行動している。



図 4

より兆候的な例はポルトガル語「mercado（メルカード）」に感化し命名された「MERC A（メルカつきまち）」ビルである。1990 年代に開館、アズレージョを外壁とし、建物前にポルトガル式石畳、正面に（ポルトガルから取寄せた）バルセロスの雄鶏を飾っている。この「MERC A」の建物は築町の視的目印となっている。

「ポルトガル都市」長崎神話の仕組み

ポルトガルでは 16、17 世紀のポルトガル海上帝国の港湾都市研究分野にて長崎に関する教養作品が 20 世紀初めの数十年の民族主義的な修史の中で定着する。つまり、大航海時代の領土拡張主義神話の発展と植民地政策の実行が同時期に起こったということだ。在東京 José da Costa Carneiro（ジョゼ・ダ・コスタ・カルナイウ）公使は「Os Portugueses no Japão nos séculos XVI e XVII（16 世紀及び 17 世紀の日本におけるポルトガル人たち）」という題で Boletim da Sociedade Luso Japonesa（ポルトガル日本協会会報）に執筆し、またこの直ぐ後 1929 年には Boletim Geral das Colónias（植民地一般会報）5 巻 53 号にも掲載された。この記事のために行った調査によると、それが長崎を「ポルトガル都市」と表現した最も古いものであった。Costa Carneiro によれば、「たとえ長崎がある期間とりわけポルトガル都市であったとしても、ポルトガル人は広く日本中に散在していた」。また記事中にポルトガル語で長崎創設を修史的に叙述する術の基礎柱の一つを見つけられる。つまりはイエズス会事業とポルトガル帝国活動を同一視する傾向、より正確に言えば同一性をより重視することである。Nau do Trato（ナウ・ドウ・トラットウ）と呼ばれるポルトガルの貿易船の往来がインド政府の協会的機能と繋がった人と富の行き来で、したがって Padroado do Oriente（「パドウルアドウ・ドウ・オリエンテ」と読み、カトリック教会がポルトガルに許可した東洋での権限を意味する）に繋がっていたと考慮するとき、長崎は海外進出範囲に刻まれたのであろう。「この帝国でのポルトガルの利益とイエズス会の福音伝道の成果は同じ頃に上がり、肩を並べて成長した。そして、衰退したときも一緒だった。」そして、「たとえポルトガル国籍または外国籍、イエズス会宣教師であったとしても、ポルトガルとの密接な繋がりにによって必然的にポルト

ガルの影響を補助する要素であった」。そのときからポルトガル修史によって暗黙に承認され、人間社会科学分野で植民地後の研究が普及した後も永続していく論拠が確立した。

東方でのポルトガルの存在を示す歴史そのものが大航海時代の海外進出についての研究から（1974年より前の）ポルトガル帝国のイデオロギー一部分として生まれた故に、ポルトガル修史上にて有意義な位置を占めるよう他の理由も存在する。長崎はそのような状況の中でマカオをポルトガル領と正当化するためのより揺るぎない論拠であったのであろう。そのような論拠を示した著者達によると、長崎は教会の命名というレベルでの類似点を含めマカオとみなされたい。この事を考え合わせ、マカオ総督自身が日本の南で最良の港としてこの地を選択し、この事が後に既に洗礼を受けていた大村純忠との商談に進展したという（全員が同一見解の）説がまだある。Manuel Teixeira（マヌエル・タイシェイラ）神父が1998年にマカオ政府によって製作されたビデオのインタビュー（Fundação Casa de Macauにて閲覧可能）で、彼が「聖都市」と表現する二都市マカオと長崎のこの種の姉妹状態がどう事実的でイデオロギー的な構築なのか詳しく述べている。長崎は土地やその占有という意ではなく、そこに宿ったキリスト教の魂とマカオとの臍の緒のような繋がりにおいてポルトガル領であった。ポルトガル支配の境界にてポルトガル人によってつくられた交易都市及びポルトガル海外進出計画の一部分と考慮される信仰の都市という意で、長崎は16世紀のポルトガル人の人間的、物質的努力のトロフィーとしての役目を負っている。

美術史家のPedro Dias（ペドル・ディアシュ）が象徴的作品『História da Arte Portuguesa no Mundo – o Espaço do Indico』（1998）にて長崎構想の問題について触れている。この著者によるとルネサンス的な建築及び都市計画というイタリア式の基本的な考え、またはイエズス会によって課せられたモデルに起因する（網状の）規則性の構想という神話があったらしい。著者はこの案（この「神話」については備考若しくは参考文献で明らかにされていない）に対し、集落は大きくなったが、ポルトガル人の行為によって創設されたのではないし、その「直角」構想は「ルネサンス」型ではないと断言しつつ反論している。そこに「広場」が欠けているからというのが主な理由である。Diasは長崎がヨーロッパ風（ルネサンス）都市である可能性がないことを述べ、またポルトガル都市であると仮説を立てることすらしてない。日本でのポルトガルの存在の面影は、とりわけ都市工学及び建築学のレベルにおいて「世界の隅々に散在していた他の領土のものと、或いはスペイン植民地領のものと全体的に異なっていた」と結論している。道と道の直交性という要点は、この記事にても分析、後述するように建築学並びに都市工学の多くの理論家達によって後に再度取り上げられ、またポルトガル都市に関する論議の再び中心となるだろう。

市の形状は土地の起伏部の配置が基本的な制約である。道及び居住区は西山と英彦山の間に限られており、17世紀の長崎の中にさえも高地と丘がある。したがって、この最初の都市開発地域は谷間の空間に限られていた偽りの直交的な網の目という規則性、そして土地の起伏に付帯するようにその網の目に対して不恰好になった道という一見矛盾した二面をもって特徴づけられる。規則通りの計画を重んじる故にルネサンス的な近代性の跡がポルトガル都市であると、そして他に即席、或いは無計画による跡があると擁護するに従い、直交性と山を登る曲がりくねった道というどちらの要点でもポルトガル的な都市の特長の跡として何年にも亘り様々な著者によって指摘されてきた。この最後のケースではJosé Manuel Fernandes（ジョゼ・マヌエレ・フェレナンデシュ）の論議的な路線のものから殆どを導き出したHelena Rodrigues（エレナ・ルドウリゲシュ）の論文が際立って

いる。ちなみに Manuel Fernandes 自身は Eduardo Kol de Carvalho³（エドゥアルドゥ・コル・デ・カレヴァリュ）の原典より起こした。

Kol de Carvalho の記録は文化的なものだけでなく主に都市計画故に長崎がポルトガル都市だったであろうことを支えるプロジェクトから起こされた。1993 年には「450 anos de memórias luso-nipónicas（ポルトガルと日本の 450 年の追憶）」という題で在日ポルトガル大使館の刊行物において「約 1 世紀を経た南蛮の存在は、幾つかの方面にて永続した」と断言し、また「長崎の都市計画構造」と例も挙げている。しかしながら、その間に浮上したポルトガル都市または都市工学におけるポルトガル派の研究と関係があるような論拠をその当時はまだ提示していなかった。それらの論拠は 1993 年当時時代遅れであったのにもかかわらず 1969 年出版の Carlos Francisco Moura（カルロシュ・フランシシュク・モウラ）の原典から、少なくともこの著者の見解から得たようだ。Moura は「戦略的理由で起伏のある場所の選択、そしてそこに合わせた規定によらない構想（中略）は、嘗てのアメリカ、アジアそしてヨーロッパにおけるポルトガル人による創設の特徴である」と書いている。

Kol de Carvalho は 10 年以上日本に滞在していた経験から、雑誌『Oriente』 No. 2（2002 年 4 月）に「Novas tendências da arquitectura na Europa e no Japão（ヨーロッパと日本の建築における新傾向）」という記事を執筆した。しかし、その後数年間、建築学と都市工学に対する興味に日本でのポルトガルの存在という歴史的判断を追加していくことになる。2004 年に Tágide より出版された『Sushi Bar, Nós e os Japoneses』は、二つの文明の接触を取り上げた最初の一作で、社会的な交際の中でポルトガルと日本の文化的特徴の対比（及び意見交換）を試みる意図でルイス・フロイスの歴史書で自叙伝でもある『Tratado das contradições e diferenças de costumes entre a europa e o japão（日本とヨーロッパの風習の違い）』に多く触れている。2006 年、日本のキリスト教導入史という主題でとりわけ日本におけるポルトガル存在を示す歴史に関する最初の本『Mártires do Japão』を Braga の Apostolado da Oração から出版した。それは日本及びイエズス会の文献で Diego Yuki（ディエグ・ユウキ/結城了悟）の研究を概ね辿るものである。同年に世界のポルトガルの建築遺産及び都市工学を主題にした『Sopa de Pedra – Trilhos do Património Português』も Tágide から出版、彼の著作目録に加わった。それは彼の観察力及び建築家としての地域解釈の能力を融合させた旅人の語調で綴られている。翌年 2007 年には「Entre Nagasaki e Angra（長崎とアングラ）」と題した記事が雑誌『Atlântida de Angra do Heroísmo』52 巻に掲載される。これは 2010 年に Tágide から出版することになる本『O império da imagem – luzes e sombras do Japão』の内容に組み込まれている。著者が出した結論は「時と空間が離れている」もののアングラ・ドウ・エルイズムと長崎が「大航海時代に外地でポルトガル人が提案し確立した近代都市計画に関する一つの同見解の結果のように肉眼で分かるほど揺るがぬ類似点がある」というものである。問題は「瓜二つの湾岸」であり、また「直交する網の目がこの二つの都市を比較研究において近付ける」と書いている。「この（網の目状の）規則性」は「日本の都市には特異」と擁護している故である。

Kol de Carvalho の論文は「大西洋の都市」、「大都市」、または「地中海都市」の構造上の模倣としての長崎という考察のなかで揺れ動きながら主に二つの事を伝えている。一つは長崎が極

³ アングラ・ドウ・エルイズムの斜面の道の蛇行及び階段の曲がりくねりと長崎のそれとの比較については、José Manuel Fernandes が 1989 年に「cidades portuguesas do atlântico」について書いたものからきている可能性がある。この著者によると、アングラ・ドウ・エルイズムは「島のポルトガル都市」モデルで、「陽の当たる斜面」・「難を避ける浦」・「有機的な発展という観点」という特徴があったらしい。著者は島の都市を新世界、そして「遥かなるインド」の都市モデルとみなしていた。しかしながら、この共通点そして（Rua Direita と Rua de Sé の交差点に基づく市、または二つの広場の構造分析を例に）他にも多くの共通点があるにもかかわらず、Kol de Carvalho はこの Manuel Fernandes から引用していない故、影響を受けたと確信できない。

東での 16、17 世紀のポルトガル人の通過場所（また短期間ではあったが揺るぎない滞在）に関する研究領域で不十分に理解された主題であることだ。その不十分さは学術的且つ外交上の無関心に至らず、むしろ逆である。二つ目は「ポルトガル都市」の研究（ポルトガルで後に改められた研究分野）という手段を通し、長崎にポルトガル特有の構想及び形状跡を見ようとする事で、土地そのもの・考古学遺跡の場所・土地住民が暮らした現実の明らかな軽視である。

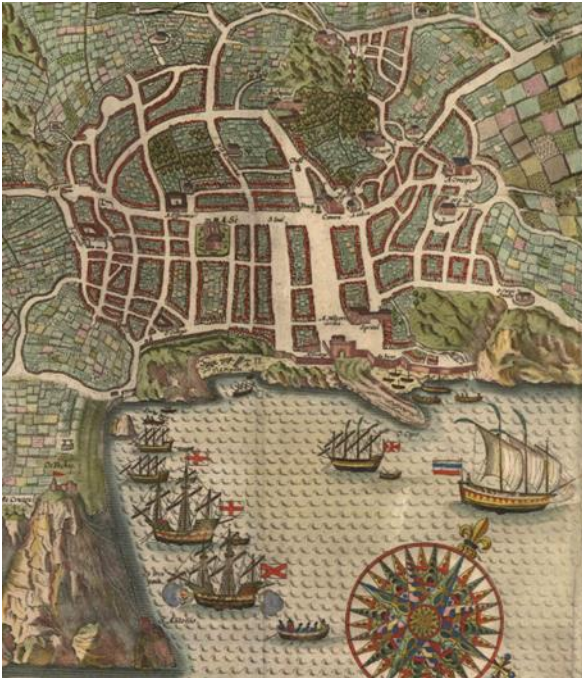


図 5

Jan Huyghen Van Linschoten（ヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテン）の版画で、Angra do Heroísmo（ポルトガル、アソーレス諸島のアングラ・ドウ・エルイズム）を訪れた際に制作した 1592 年の図である。海からのアングラの町と湾岸は後に旅行記

『Voyage ofte schipvaert van naar Ooster ofte Portuguese Indien inhandende een certe beschrijvinge de salaer landen inde zeecusen...1579-1592（船乗りヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテンが 1572 年から 1592 年にかけてポルトガル領東インドに船旅をした時の旅行記）』の一部として掲載される。

この版画こそ Kol de Carvalho が長崎とアングラの歴史的中核の類似を立証するために論拠上で引用しているものである。

Kol de Carvalho は長崎のポルトガルの無形文化的影響は必然的に都市構造の中に反映されていたであろうということを前提に論拠を確立した。そして、この論文を支えるために（史料、年代、用途、または現状は特定されていないのだが）参考文献として考慮した図像的記録と比較しアングラのように明解なモデルを選んだが、土地データとの照合は必要としなかった。このようにアングラの遺産化解釈が長崎に採り入れられたことが暗黙になった。この道理では料理法・言葉・お祭り等の文化的な要素を合わせたものだけではなく、長崎全体がポルトガル影響の遺産と理解されるであろう。この提案は遺産に関する動きについての理論及び方法論にて逆行の一面を表している。1994 年に奈良で行われたユネスコ会議、そしてその結果生じた遺産と真正性に関する取り決め以降、必ずしも具体的な領域表示（建設された遺産若しくは考古学遺跡）の付随を必要とせず、無形文化遺産の正当性と完全性が確立するようになってきている。奈良で明確にされた考えは、正に「生きている遺産」・「生きている宝」（实际的知識があり、それを継承している人達・周期的に再建または改築されている建物・その他の現地の神聖な場と結びついた祭礼等の催し）という日本の見解から汲まれた。そして、遺産研究はその時点から建物及び都市構造の排他的面での有形を遺産価値と言外に意味していた境及び違いを積極的に崩してきている。

都市形態学並びに都市工学の観点からポルトガル都市としての長崎の論議が多くの結果を得られなかったのは、「創設」という象徴的価値を考慮する際に意味するもの全て、長崎がポルトガル人によって確実に創設された一都市であるという提示がなかったからである。それは他の様々な文献で未だ繰り返し起きており、より功績ある研究センターの教育的なものでさえかすかに見せている。Centro de História de Além-Mar（大航海時代外地歴史センター）の場合がその例である。ポルトガル大航海時代海外進出についてのインターネット百科事典の一記事

(<http://www.fcsh.unl.pt/cham/eve/content.php?printconceito=153> にてアクセス可) に長崎が次のように定義されている。「1570 年に創設された」、そして「日本で唯一ポルトガル人によって建設された町」と取り上げられている。それは「ポルトガル貿易船の常用ターミナルとして機能可能で、それと同時に各地方から追放された様々なキリシタン達のための庇護港を備えるような安全な場所を見つけるという願望」に起因するのであろう。単に内容を短縮化、単純化する目的の「ポルトガル人によって創設された町」という簡略化は、即座に解釈する際に名称・年代・その他の事実に関するデータを都合良く閲覧するような学生や研究者の立場からは、偶然にも正当化され得る。しかしながら、既に見たように長崎創設時の出来事の複雑さは都市の発展及び様々な行政モデル同様、あまりに凡俗な正当化とは合致しない。インターネット百科事典のその記事の詳説においては「ポルトガル帝国の歴史」というイデオロギー的な継承の負荷は軽くなっている。ポルトガル人がいた事と直接関係がある都市だという理由が提示されているが、とりわけ「その体制は失敗した試みである 1562 年の横瀬浦⁴及び 1565 年の福田⁵での定着も含め日本地区の責任者であるコスモ・デ・トルレスと大村領主の純忠の交渉進行中に頂点に達する」という箇所を通して長崎についての本文はプロセスが対外的強制でなく、「植民地化」のケースさえ考慮不可と示唆する。

長崎のケースは極東でのポルトガルの存在に関する研究から見て、その稀有なこと、端（大航海時代の海外進出のきわ）であること中心人物達が選択した譲渡・協定・適応という創造的な解決策によって際立っている。しかしながら、ポルトガルの学会によって生み出された極東にてのポルトガル存在に関する修史は受け継いだイデオロギーそのものについての批評・概念についての再検討・用語に関する討論を担っていない。したがって、擁護している件に関し、その内容を正当化する事実及び原典の有無に関わらず、多くの場合に内容があまり明白ではない。先に言及したばかりの基礎資料における長崎の存在はポルトガル貿易船往来の運行規制の影響、より正確に言えばどんな寄港地に停泊していた時にも或いは一時的な停泊期間であったとしても船長が乗組員という共同体の政府長であるというその権限故にポルトガル領インドの構成部分と考慮されていた結果である。長崎は「ポルトガル人によって建設された」と言われている。何故なら、港組織の設置に向けた交渉の進行が一人のポルトガル人（イエズス会士）と土地の権力者との間で行われたからである。ポルトガルの行為がコスモ・デ・トルレスの行為に取って代わったというイエズス会事業と国民国家的な事業を区別しない筋道は、このような同一性の蓄積にある。

有形、無形、並びに人間的価値の結合としての文化遺産

⁴ 横瀬浦は港に向かい合った岬の高台（現在の横瀬浦公園）に教会があった。その地では 1562 年から 1563 年にかけて西洋人並びにキリシタンの保護をしていた人物が退けられ、宣教師や商人が歓迎されなくなるまで、国際色豊かな生活様式の中で彼らは地元住民と肩を並べて暮らしていた。

⁵ 福田は港があり、今日は長崎市に編入されている。しかし、当時は全く分かれていた。福田は港として利用が継続されているが、深喫水船の入港条件にあまり適していない。

町内会はポルトガルの名残をとどめる長崎の遺産の面で土地のデータ研究・地図同士の比較照合・参考資料の解釈同様、有意義な一つの情報源並びに調査背景を代表する存在である。築町もその南西にある銅座町も研究者の立場から見て大変重要な意味を持っている。

銅座町は日本の他の都市同様、領土・制度・友愛の角度から適切な表現で市内の小さな村である。近隣の住民でつくる共同体は形式的には国家に属さず半官半民であるという意にて市民団体という類型論で不明瞭な存在と考慮され得る（Pekkanen, 2009: 28）。銅座町はおおよそ菱形で部分的に埋立地に在り、出島の東隣に位置している。また、南側の境界は水路と橋に隔てられ長崎の中華街（最近のコミュニティ）と直に接し、西側の境界、したがって出島からわずか数メートルの地点には十八銀行長崎経済研究所文化事業部に統合されて長崎日本ポルトガル協会がある。ちなみにこの金融機関はポルトガル領事館だったこともある。

長崎で一番重要な年間行事、諏訪神社のおくんちへのこの町の参加は長崎でのポルトガルの名残をテーマとする特徴的なものである。より正確には 16 世紀のポルトガル船、南蛮船の演（だし物（歌・踊り・その他の実演）を通してそれを伝える。祭りは内町全てを含む長崎のより古い地域を通るコースで行われ、諏訪神社での活動範囲以外でも市内の至る所でこの船が披露される。このように各々の町の演し物は市内中にメンバーまたは協力してくれた人達（他の町に住んでいる人または長崎市外の人であっても）の才能・この行事の準備並びに投資能力・欠くことのできない特徴を各町が披露する一つの形である。これらは町のイメージの総体を通して明白であり、各町における雄弁な存在・人的、物質の原型（船または史跡の型など）・説話・土地の歴史に関する構成要素により簡単に確認できる。

銅座町は外からの押し付けまたは学術的な調査の影響ではなく、異なる動機の融合の結果として自らの町ために長崎における南蛮時代のポルトガルをテーマに選んだ。南蛮船の演し物の創作のため、南蛮屏風（大阪の南蛮文化館に所蔵されている屏風の一隻で、長崎日本ポルトガル協会の展示室にはその複製品がある）・映像・特集・地元または日本国内のテレビ局によって製作されたその他の番組・一般書籍または日本史の教科書から収集された絵や写真に由来する図像データを使った。町そのものとテーマが同一視状態にある理由は二つの意図を根拠としている。一つは町の区域が 20 世紀初めまで長崎に拠点を置いていた商家の所有地だった場所に一致し、この商家が南蛮美術を収集していたことである。もう一つはこの場所が町内の住民及び店主達に「ポルトガル人達が暮らしていた町（インタビューより）」と考えられていたことである。このポルトガル人達は主に岬の南、したがって銅座町・築町・出島の北に隣接した町々で長崎の地元住民に混じって生活していたのであろう。しかしながら、銅座町は南蛮料理という料理法や日本ポルトガル協会との関係などポルトガルの名残をとどめるものがより定着している共同体である。



図 6

2010 年、銅座町の南蛮船（諏訪神社での演し物の奉納）

長崎は二種類の南蛮時代におけるポルトガルの跡が見られ、これらは学術的な判断基準、また西洋での都市工学に関する研究基準によれば際立ったものであると考慮されている。しかしながら、日本では余事の優先並びに市の歴史に対する理解の仕方と混合している。一方で、考古学遺跡の有無に関わらず文書により証明されるならば、ある特定の建物、教会または城等の場所であると明確に区分される。他方で、口伝・形見としての習慣・各町の歴史認識が存在し、市中で説話が作られ、（現存しない今下町との近接故に）築町のように先祖伝来の重要性を受け止めている。

遺跡は先にも言及した様に石の標識で一定に示されており、その設置は 1960 年代まで遡り、市内のそして県内の別の地域の様々な場所で行われたが、これは必然的に遺跡という物的存在または発掘による検証を意味していない。場所及びその活用区分は、研究者と役所の管理業務にて南蛮時代のポルトガルと関係がある様々な教会及びその他関連場所を位置的に再構成できたことから、『寛永長崎港図』のような都市図中での立証も可能である。この情報は日本語で多量にあり、市の観光事業促進の為にここ数十年利用されている。今日、長崎奉行の資料及びイエズス会の原典以降の多様な文献が東京と長崎に保管されており、出島のカピタン日記からの写しを通して市及びこれらの場所⁶の正確な位置を割り出すことが可能である。

その何件かのケースでは発掘調査及び美術館化等の埋蔵文化財保護に至っている。サント・ドミンゴ教会はその例で、2004 年に遺構部分を含む教会跡資料館が会館した。日本語・韓国語・英語の三カ国語で表示された説明版は図解と地図を含み、特に長崎県が「キリシタンの地」としてユネスコの世界遺産暫定リスト⁷に追加掲載が決まった 2007⁸年以降、現場に設置された。

⁶ 説明版でそこに何の屋敷があったかを知ることができても、その大きさや形、ひろがりまでは見当が付かない。地図上でその存在と名前を確認できるが、外観や内観のような名前や機能以上の情報提供はない。

⁷ ユネスコの世界遺産暫定リスト <http://whc.unesco.org/en/tentativelists/5096/>

サント・ドミンゴ教会跡資料館 <http://www.city.nagasaki.lg.jp.e.jc.hp.transer.com/shimin/190001/192001/p000835.html>

⁸ 2006 年に長崎にて町歩き博覧会が 7 ヶ月間開催され、国際観光都市としての長崎市を運命付けた。日本で初めて長崎の町歩き計画が紹介された博覧会であった。この計画は発展し、市全体に広がり、まずまずの結果を出した。翌年、長崎市は日常的な町歩き（市の専門ガイドによって案内される町歩き）計画を発展させ、継続することを決め、その内容を（博覧会の時に比べ）より充実させた。現在まで人々は長崎観光にこの町歩きを享受し、（真のそして現在の）長崎市をよりよく知る方法となっていくっている。その上、長崎市民自身があまり知られていない身近な遺産を見つけ出している。この計画は無形遺産に焦点をあて始め、また市民が地元の歴史を新たな眼差しで見つめることを可能にし始めた。

サント・ドミンゴ教会は他に比べ、より大きな考古学的な土台と共により資料裏付けがあるケースである。その所在地は少なくとも江戸時代から勝利の山という名の勝山町であり、形態論及び土地の意味に合わせ、広義で「(物理的にも階級的にも) 上からの観点」と解釈することも可能である。この教会はバテレン追放令及び日本人に対するキリスト教禁止令の結果、他の教会同様に取り壊され焼かれたので、「勝利」はキリシタンのものでない。ここには後に私的用途の別の建物があり、道の計画も変更された。より古い占有、そして教会であった可能性を示していた初期の考古学上の跡は、ある大学報告書によると 1939 年に見つけられた。しかし、17 世紀の地層レベルで遺跡発掘調査及び解釈がなされたのはやっと 2000 年だった。近くには現在の長崎歴史文化博物館があり、その館内には江戸時代の長崎奉行所が復元されている。この歴史的な復元物は、長崎に対して幕府の権力が確立して以来、外国人（この頃はオランダ人・中国人・韓国人）が長崎奉行所の役人の傍らで自らがもたらす利について口述する定期的な聴聞の為に使われていた場所を正しく占めている。また、裁判所としての機能も備え、少なくとも 17 世紀後半から禁教令に背いているかと疑わしい者達に背教宣言させた場所もここであった。踏み絵⁹は絵の上にしっかりと足を置き、キリシタンではないと声を出して断言し、さらに図像が聖なる物であることを否認する目的で、キリスト教禁止令に背いていると疑わしき者に提示された。読者は様々な場所の位置が表示された都市図にて、サント・ドミンゴ教会が博物館の復元された奉行所並びに聴聞室から実に僅か数百メートルの所に在ると確認できる。したがって、たとえ管理レベルでは相互関係になくとも、サント・ドミンゴ教会跡資料館と外国人またはキリシタンと疑わしき者達が踏絵を強いられた嘗ての裁判所とで一つのテーマの中核を成している。



図 7

サント・ドミゴンゴ教会跡資料館の遺構ゾーン

サント・ドミゴンゴ教会跡資料館の遺構ゾーンは考古学遺跡を覆う形で在り、来館者は高床通路に沿って進みながら現場を見学できる。展示室ゾーンでは発掘調査での出土品と映像を紹介している。また、館内全てのゾーンには模式図付きのいくつもの日本語解説パネルがあり、部分的に発掘された土地を来館者に案内する解説では、使用されて平らになった石が敷き詰められている部分が「16 世紀のイベリア舗装」と確認させる。そこはサント・ドミンゴ教会の入り口前を正

⁹ 踏み絵は紙に描かれたものもあったが、金属板に彫られたものがより多く使われ、キリスト磔刑図・ピエタ・聖母子像・その他のキリスト教関連図など教理の象徴的な図像であった。その信心深い者が祈りをささげる護符及び絵と同じようなものを信仰拒否のために逆の手段として使っていた。

に形成している。それ以外にも教会脇の道の石舗装はもちろん、井戸並びに現存しない道の両側の水路さえも 17 世紀のポルトガル人及びスペイン人によって造られた構造跡として紹介されている。

サント・ドミンゴ教会以外に、長崎でポルトガルの著しい名残をとどめている場所は出島である。この島は町の天然の岬の正に先端に築かれた人工島で、橋と門で陸と繋がっており、1636 年から外国人のゲットーとなっていた。元は面積 15,000 m²で、最初の住民は 1636 年の日本の調査で記録されたポルトガル船 4 隻の乗組員の合計 800 人であった。島の創設は西洋人と日本人の分離令により正当化される¹⁰。その時までポルトガル人達は自分達の家族と一緒に市内で暮らし、拘束されることなく自らの役割を果たしていた。出島はポルトガル都市工学上の遺跡ではないが、長崎におけるポルトガル関連の歴史との繋がりが見られる。その建設で町は部分的に過疎化（彼の内町が無人となった）し、町自身にも変化をもたらした他、日本人商人達が貿易を最大限に利用する程まで如何に成長していたかを示すこととなった。島の築造命令及び埋め立てへの財政支援にもかかわらず、橋と門は幕府から直々の出資であり、ポルトガル人に貸すためのスペースは建物の建設並びに全ての準備が日本人商人達の懐によって賄われた。そうしてポルトガル人は出島に入港するために長崎の商人に借料を支払い¹¹、商業利益は減少し、隠れ宣教師達への支援勢力もまた更に縮小した。したがって、出島は中央（幕府）同様、地元の支配組織によっても、町及び人々の管理に関する支配を再び掌握する意図で、空間的な分離・心理的な繋がりの切断・利ざやの減少の解決策となった。

出島については考古学的な発掘調査がそのデータの読み取りを可能とする地層レベルに達していない故、18 世紀以前の建物の形状やスペースの配分については殆ど分かっていない。今日「出島跡」として紹介され入場も可能な所は、オランダ商館として出島を描写する版面や資料を基に本来の場所にて復元されたものである。（2010 年からの）出島跡の形状がオランダ東インド会社の黄金時代の再現にもかかわらず、ポルトガル人が居た歴史は忘れられていない。長崎でポルトガルから継承したと感じさせる文化遺産に関する日本の学術文献によると、出島は来場者に住民から言い伝え・伝統的な料理法・言語的、哲学的な慣習まで、市内にてそれらの名残りをどう見つけられるかを示している。その指摘は日本語・中国語・韓国語の音声ガイドで、ガイド同行のツアーで、そして英語でも表示がある解説パネル¹²でもなされている。出島の建物内にもなお、『寛永長崎港図』が土地の歴史についての解説図付き説明パネルの一つに多様な手段で町の起源を紹介する際に使われる図像的な原典としての重要性を強調しつつ再登場する。

¹⁰ キリスト教の公での信教禁止に続き、（外国人に対して）布教活動及び（日本人に対して）キリシタンになることが禁止され、最終的には 1634 年に市からのキリシタン追放に至った。そして、中間的な解決策として人工島が提示される。それは長崎での貿易浸透並びに日本の地でのキリスト教禁止の公示に対する遵守を可能にした。しかしながら、当局の悪意・隠密に活動する宣教師達の執拗さ・（特に市内での暮らしに慣れていた南蛮人にとって）島の僅かな条件での不可能な暮らし故に、出島にポルトガル人（及びスペイン人）が居たのは 1640 年までであった。

¹¹ 日本語版の出島の案内書によると、ポルトガル人に対する出島での家賃及び地代は 80 貫であった。

¹² 「The fruits of Portuguese trade, such as raw silk, silk fabrics, woolen, cottoncloth, confections, and even deep-frying and other cooking methods exerted a strong influence on Japanese lifestyles. New ways of thinking also filtered into Japan from the Catholic priests who settled here. The rich heritage of the Portuguese and Spanish who visited Japan in the 16th century is called "Namban Culture". This cultural heritage was strongly influenced by Christianity because both countries engaged in religious as well as commercial activities. Although it came to a sudden end with the curtailment of Portuguese trade and the enforcement of a ban on Christianity, this heritage lives on today in naturalized words and various other aspects of Japanese culture.」（英語版解説より）

考察

長崎でポルトガルに由来する遺産は、起源についての神話に取って代わられ本来の起源が消散してしまったポルトガルの影響が見られる遺産である。考古学遺跡と特定された正にその場所を除いても、市は自身について「異国の人々と日本人先住民とが混在していた」とメッセージを発している。そのように理解すると、遺産は、多くが無形表明から成っている。例としては、土地の方言に定着し溶け込んだ言葉・町におけるポルトガルにかかわる歴史を取り込み、ある特定共同体の独自のしるしとしてその歴史に再び価値を持たせる祭り・南蛮料理という料理法を含めた技術または知識の総体等であり、昔から今もなお続くポルトガル商人やイエズス会士等の計り知れないほどの原型像の使用でさえもその一例である。それらの像は、南蛮美術の作品（オリジナル及び/またはレプリカ、さらに視聴覚メディアにてのその表現）を第一の源として生じ、祭り・観光地・市の宣伝用映像・マーチャンダイジングを目的とする商品製造に着想を与えている。

日本文化にとって遺産という意に合わない都市計画及び建築技術上の遺産という観点ではサント・ドミンゴ教会を例に幾つかの跡が存在する。しなしながら、機会または援助の不足・土地の特徴故に考古学的調査を実現する難しさ・仮説を支える参考資料の真正欠如が絡み合い、長崎の住民に対する 17 世紀の西洋の宗教的、哲学的な考え方の影響調査のようにこの分野を他分野の従属的な立場に追い込んでいる。

文献目録

布袋 厚『復元！江戸時代の長崎』長崎文献社 2010

AA.VV. (edição em actualização constante, em linha) Enciclopédia Virtual da Expansão Portuguesa, Centro de História de Além-Mar. <http://www.fcsh.unl.pt/cham/eve/>

Carneiro, J. “Os Portugueses no Japão nos séculos XVI e XVII” Boletim Geral das Colónias, nº 53, 1929

Carvalho, E. “Entre Nagasaqui e Angra” Atlântida - Revista de Cultura, Vol LII, 2007, Instituto de Cultura, Angra do Heroísmo, 2007 pp.87-98

Carvalho, E. “Nagasaqui - uma cidade maneirista na Ásia” O Império da Imagem - Luzes e Sombras do Japão, Tágide, Dafundo, 2010 pp.133-147

Costa, J. “Os portugueses no Japão” Portugal no Mundo (Dir. Luís de Albuquerque), Vol. IV, Alfa, Lisboa, 1989 pp.180-196

Dias, P. “A presença portuguesa e as transformações na estética tradicional do Japão” História da Arte Portuguesa no Mundo (1415-1822) O Espaço do Índico, Círculo de Leitores, Lisboa, 1998

Dinis, S. “Nagasaki” Património de Origem Portuguesa no Mundo - arquitectura e urbanismo (Dir. José Matoso), Fundação Calouste Gulbenkian, Lisboa, 2010 pp.254-255

Moura, C. “Nagasaki - cidade portuguesa no Japão” Separata da Revista Studia, nº 26, 1969, Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, Lisboa, 1969

Rodrigues, H. Nagasáqui Namban: das origens à expulsão dos Portugueses, Dissertação de Mestrado em História e Arqueologia dos Descobrimentos e da Expansão Portuguesa apresentada à Faculdade de Ciências Sociais e Humanas da Universidade Nova de Lisboa (新リスボン大学人間社会科学部における大航海時代のポルトガルに関する歴史及び考古学に関する修士論文), 2006

Rossa, W. & Trindade, L. “Questões e antecedentes da «Cidade Portuguesa»: o conhecimento sobre o urbanismo medieval e a sua expressão morfológica” Murphy - Revista de História e Teoria da Arquitectura e do Urbanismo, Março de 2006 pp.70-109